

博士学位論文審査要旨

氏 名	英 荷
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 279 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	内モンゴルにおけるチベット仏教の再興に関する研究 ーホルチン地方のチベット仏教寺院に着目してー
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 佐 野 賢 治 副査 神奈川大学 教授 小 熊 誠 副査 神奈川大学 教授 周 星 副査 神奈川大学 名誉教授 森 武 磨

【論文内容の要旨】

中国では、1980 年代に改革開放政策が実施されて以降、宗教政策の緩和により、中国全土で宗教活動が復活した。内モンゴル自治区においても、現在ほぼ復活したとされる。

歴史的に見ると、モンゴルへのチベット仏教の伝来は、2 回にわたり行われた。1 回目の伝来は 13 世紀で、サキヤ派によるもので、宮廷や貴族に信奉され、元朝期には国家宗教にもなったが、元朝の終焉とともに衰退の道を辿った。2 回目の伝来は、16 世紀、アルタン・ハーンによりゲルク派（黄教）が伝えられた。各地にチベット仏教寺院が建てられ、17 世紀にはモンゴル族のほとんどがチベット仏教徒になった。以後、チベット仏教はモンゴル族の生活に密着し民衆化した。しかし、新中国成立後の一連の政治運動の中で、宗教は「迷信」とされ、すべての宗教活動は禁止された。内モンゴルでも、チベット仏教寺院は破壊され、ラマ僧も還俗させられ大きな打撃を受けた。そして現在、改革開放政策が進展する中、チベット仏教は復興の時代を迎えている。

本論文では、モンゴル族の居住率が高い内モンゴル東部ホルチン地方の牧畜、半農半牧、都市地域に所在するチベット仏教寺院を対象として、現地調査を行って得た史・資料に基づき、当地方におけるチベット仏教の再興、人々の仏教信仰の現況を、以下の章節立てで論じる。

序章

第 1 節 問題提起

第 2 節 本研究の目的

第 3 節 先行研究と本研究の視点 （1）先行研究 （2）本研究の視点

第 4 節 調査地域と研究方法 （1）調査地の選定 （2）研究方法 （3）用語定義

第 5 節 論文構成

第 1 章 内モンゴルにおけるチベット仏教の概況

はじめに

第 1 節 チベット仏教の伝来と拡大 （1）チベット仏教の伝来 （2）チベット仏教の拡大

第 2 節 チベット仏教の発展と改革 （1）チベット仏教の発展 （2）チベット仏教の改革

第 3 節 チベット仏教の衰退 （1）「土地改革」運動の影響 （2）「文化大革命」の影響

第 4 節 内モンゴルにおけるチベット仏教寺院

（1）内モンゴル東部地域 （2）内モンゴル西部地域

おわりに

第2章 内モンゴルにおけるチベット仏教の再興

はじめに

第1節 チベット仏教再興の背景

- (1) 宗教に関する公文書 (2) 内モンゴルにおけるチベット仏教に関する規定
- (3) 宗教に関する行政法規

第2節 チベット仏教寺院の復興

第3節 転生ラマ僧の認定 (1) 転生ラマ僧とその継承 (2) 新転生ラマ僧の認定

第4節 宗教団体と仏教学校の設立

- (1) 宗教団体の復活と成立 (2) 内モンゴル仏教学校の設立

おわりに

第3章 ホルチン地方の概要

はじめに

第1節 ホルチンの歴史状況 (1) ホルチン部族 (2) ホルチン地方における漢民族の移住

第2節 ホルチンの概況 (1) 地理的位置、気候 (2) 行政単位、人口

第3節 ホルチン・モンゴル人の日常生活

- (1) 生業 (2) 食生活 (3) 年中行事と儀礼食

第4節 ホルチン人の宗教と信仰

- (1) 外来宗教 (2) シャーマニズム (3) 民間信仰

おわりに

第4章 牧畜地域のチベット仏教寺院の復興

ージャロード旗ゲルチョロー・ソモのバンスン・スンを事例にー

はじめに

第1節 調査地の概要

第2節 ジャロード旗のチベット仏教

第3節 バンスン・スンの復興プロセス

- (1) バンスン・スンの歴史的経緯 (2) バンスン・スンの復興

第4節 ジャロード・ゲゲーン

- (1) 歴代のメイリン・ゲゲーン (2) バンスン・スムのラシボンソグ・ゲゲーン

第5節 現在のバンスン・スム

- (1) 建物の配置 (2) スムのラマ僧 (3) 管理組織と運営状況
- (4) スムの宗教活動

第6節 スム・オボー祭祀儀礼

- (1) オボー信仰 (2) バンスン・スム・オボーの由来
- (3) スム・オボーの祭祀儀礼 (4) スム・オボーの比較考察

おわりに

第5章 半農半牧地域におけるチベット仏教寺院の復興と修築

ーフレイ旗三大寺を事例としてー

はじめに

第1節 調査地の概要

第2節 フレイ旗のチベット仏教

- (1) シレート・フレイ・ジャサク・ラマ旗 (2) フレイ旗のチベット仏教寺院

第3節 三大寺の概況と復興 (1) 三大寺の概況 (2) 三大寺の復興

第4節 現在の三大寺

- (1) ラマ僧の生活 (2) 管理組織 (3) 経済状況 (4) 寺院の年中行事

第5節 マニ・ホロルの実態

- (1) 準備作業 (2) 進行スケジュール (3) 読経会 (4) 3つの行事

第6節 三大寺の社会的機能

- (1) 宗教活動や文化活動の中心地 (2) 地域発展を支える力としての寺院
(3) その他

おわりに

第6章 都市地域におけるチベット仏教寺院の建立 ―ホルチン区の大楽林寺を事例として―
はじめに

第1節 調査地概要

第2節 大楽林寺の歴史の概要 (1) 建立の経歴 (2) 大楽林寺の設立者

第3節 大楽林寺の現状 (1) 寺院の建物 (2) 寺院のラマ僧と職員 (3) 寺院の管理と運営 (4) 寺院の宗教活動

第4節 寺院における集団的火祭祀

- (1) モンゴル人の火の祭祀 (2) 大楽林寺における火の祭祀

第5節 大楽林寺の民間信仰

- (1) 胡三太爺廟 (2) 土地廟 (3) 黄大仙廟 (4) 玉皇廟

おわりに

終章

第1節 ホルチン地方におけるチベット仏教寺院の復興現況

- (1) ホルチン地方にチベット仏教寺院の復興の要因
(2) ホルチン地方のチベット仏教寺院に存在する問題
(3) 寺院の地域社会における位置付け

第2節 ホルチン・モンゴル人の仏教信仰とその変遷

- (1) 寺院、ラマ僧に対する態度 (2) 宗教活動に対する認識
(3) 供え物に対する意識 (4) ホルチン・モンゴル人の仏教信仰の変遷

第3節 今後の課題

巻末には参考文献・資料を付すが、各章の概要を示す。

第1章では、内モンゴルにおけるチベット仏教の伝来当初から再興までの歴史的展開を概述する。チベット仏教は、内モンゴルの各地に伝播した後、長い年月をかけ拡大・発展・改革・衰退、そして再興という段階を経過している。

第2章では、内モンゴルにおけるチベット仏教の再興を、チベット仏教寺院の復興、転生ラマ僧の再認定、内モンゴル仏教協会の復活、チベット仏教学校の設立、という4つのテーマを取り上げ考察した。中でも転生ラマ僧の政府による認定問題に注目する。内モンゴルにおける転生ラマ僧の転生は認められてはいるものの、その認定は、ほぼ停滞しているのが現状である。

第3章では、内モンゴル自治区でも、モンゴル族が集住するホルチン地方の歴史と現況を、生業をはじめ食生活、年中行事、仏教信仰、民間信仰などから概観する。特に、ホルチン・モンゴル族の祖先崇拜と民間信仰における祭祀儀礼の変化を、実地調査によって明らかにした。

第4章では、牧畜地区のバンスン・スムを事例として取り上げ、バンスン・スムの歴史や復興のプロセス、現状を紹介する。バンスン・スムの特徴としては、政府に認定された転生ラマ僧、民間のラマ僧医者、スム・オボーの存在などが挙げられる。

第5章では、半農半牧地域、フレー旗の三大寺院を事例として取り上げる。三大寺院は政治運動の影響が少なかった寺院で、現在は文化資源化、観光開発されている。これらの寺院の年中行事や法会は復活した状況を呈しており、寺院への参詣が人々の習慣となっている。当然、多くの信者にとって、寺院は宗教活動の中心地であり、精神生活において不可欠な存在である。その実態を考察し、寺院の復活の意味や役割を検討する。

第6章では、都市地域にあるチベット仏教寺院の事例として、通遼市に所在する大楽林寺を取り上げる。大楽林寺は近年建立された寺院で、漢族の民間信仰とモンゴル族の民間の祭祀儀礼が混在している。このような現象は、都市地域におけるチベット仏教寺院には従来認められず、革新的ともいえる。

結論では、本研究で明らかになった内容をまとめた。ホルチン地方のチベット仏教寺院は、民衆の願い、要望を基に、国家の宗教政策、地方政府の地域振興政策などにより復興された。現在、チベット仏教寺院は地域社会における宗教、医療、経済の中心として大きな役割を果たしている。その一方、ラマ僧の減少と仏教的知識の低下、宗教活動の簡素化や世俗化などの問題が発生しているといえる。

【論文審査の結果の要旨】

中国では1949年の新中国建国以降さまざまな社会主義運動が展開する中、宗教は社会悪、「迷信」、「アヘン」と迫害を受け、宗教活動に関係する場所は閉鎖され、また壊された。モンゴル族はチベット仏教を「シラン・シャシン」（黄教）あるいはラマ教、寺院をラマ廟と呼び、モンゴル語で「スム」ともいうが、1966～76年の文化大革命による宗教弾圧は徹底したもので、内モンゴル自治区においてもチベット仏教寺院はほぼ破壊され、廃墟となった。

本論文は、1980年代以降の改革開放政策による宗教活動の緩和により復活、再興したチベット仏教寺院、「スム」と人々の仏教信仰との関係を現地調査により、その連続性と非連続性の両面から分析している。現代中国の宗教政策においては、宗教、信仰の自由は認めるものの、その一方で、信じない自由も強調される。この中で、チベット仏教は人類の精神文化、および伝統的文化の中で最も保守的な性格を示すものとして位置づけられ、加えて、都市化など急速な経済的発展に伴う物質文明の波はチベット仏教寺院にも押し寄せ大きな変革を促している。このような状況下、チベット仏教に関する調査研究には、女人禁制などさまざまな制約が伴う中、モンゴル族の女性である筆者がラマ僧、信徒への聞き書き、寺院儀礼の参与観察、史資料の博搜と読破により、現時点での内モンゴル・ホルチン地域の代表的なチベット仏教寺院の精細な「寺院誌」の性格を持つ本論文を纏めたことは第一に高く評価できる。

その一方で、さらに内容的に補い、深化させるべき点、また言及の欲しい点もある。本論には、モンゴル仏教ではなく、チベット仏教の再興と題されているように、自然信仰、シャーマニズムを民俗信仰の核としてきたモンゴル族がなぜ外来の成立宗教であるチベット仏教を選好したのかの問題意識が基調にある。調査地を、牧畜、半農半牧、都市地域で代表させたのも、生業の変遷、民族人口の混交率を指標にして、伝統的社会からの近代化への度合いの中で、モンゴル族の人々とチベット仏教寺院の関係を描き出そうとの意図がうかがえる。牧畜地域のバンスン・スムの特徴として転生ラマ僧の存在を挙げるなど、チベット仏教特有のプライオリティが寺院の権威付けとなり人々の信仰心を誘発するという指摘には頷かされる。さらに、マニ・ホロル儀式で配られる薬の薬効への期待、仏教行事の文化資源化、観光化にチャム（仮面舞踊）執行の有無が関係する指摘などにチベット仏教復興におけるチベット仏教本来の真正性への人々の希求が読み取れる。

そこで、筆者にはチベット仏教とモンゴル族の民俗信仰との関係性をとらえる視角の提示が第一に求められる。モンゴル族の民俗信仰の象徴ともいえ、テングリ（天神）を招く場、オボー（石碓）がスム・オボーとして寺院の境内に設けられる事例では、ラマ僧による儀式の執行次第と、在来のシャーマンによるオボー儀礼の比較による具体的な異同から、チベット仏教と民俗信仰の習合の位相、モンゴル族の仏教民俗の形成が読み取れるからである。一方、人々は復活、世俗化したチベット仏教を本来のものと認めず、師資相承の伝統を継ぐ「転生」ラマ僧に純正の仏教哲理の教えを求める、そこにモンゴル族によるチベット仏教の再興を認める。筆者はいずれの立場、視角に立つのかである。第二には本論の背景となる、チベット仏教のモンゴル族への受容、土着化過程の大枠での解説の必要性である。二期にわたって伝来したチベット仏教が、その間、なぜ定着しなかったの

か、貴族と民衆と布教対象の相違だけなのか、まず大きな課題となるが、一方後代になると各家族から男子一人は必ずラマ僧にするなど社会制度との関係も土着化の深度を示すものとして一言が欲しかった。なお、今次大戦中、参謀本部による宣撫工作、諜報活動にラマ僧が関係していたことが、『陸満機密大日記』（1940 防衛省防衛研究所蔵）『蒙古喇嘛教とその対策意見』（1941 同）などの史料に散見されると筆者は貴重な報告をしている。チベット仏教寺院「スム」がモンゴル族の生活に密着していたことの証左であり、筆者の今後の研究を期待したい。このように本論の個々の指摘や分析に対し、さらなる解説が望まれるのは、本論が問題点を総括的、具体的に提示しているからであり、今後の展開、大成が待たれる。

本論は換言すれば、チベット仏教と民俗信仰との習合により「モンゴル仏教」が形成され、その性格を遡及的に、また現代的に論じたものといえる。少なくとも大乘仏教圏におけるチベット仏教、中国仏教、朝鮮仏教、日本仏教の異同は、仏教を指標にしての比較民俗論ともなり、それぞれの民族性・民俗性（一民族内における地域性、ここではモンゴル族のホルチン地方）を明らかにする視角を提示した論考としても評価することができる。日本における仏教民俗、神仏習合史を考える上でも大きな示唆を与えてくれる。

いずれにせよ、本論文は幾多の制約がある中、現地調査による聞き書き資料を中心に、関係する地方志、民俗方面の文字記録を博搜、精読し、現時点でのチベット仏教寺院の「寺院誌」的記録としてまとめ、その上で先行研究の整理と検討を加え、テーマに対する分析と考察を的確に行った労作といえる。

以上、中国、内モンゴル自治区におけるチベット仏教寺院の復興の現状を寺院・僧侶サイドと民衆サイド、連続性と非連続性の両面から具体的に提示したことはまさに歴史民俗資料学の論文として高く評価できる。また、口頭試問において筆者に更なる質問も試みたがいずれも相応しい応答であった。その結果も合わせ、英菊氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。